少費・省力コメづくりへの挑戦 ③

# 初期生育の促進拡大が基本

指導部顧問　松浦一宇

## 浅植えで開張型のイネに

丹精こめて育てた苗を本田に移植する「五月」である。

植付け深さや、田植え後の保温的な水管理など、理に適った作業を一つ一つ積みかさねて、初期生育の促進拡大に繋げることが重要である。

機械田植えで特に留意したい事柄として

**1、田植機のスピードは控え目にすること（垂直に植える）。**

**2、2～3㎝の浅植えにすること。**

**3、品種特性を十分に発揮できる栽植密度とすること。**

**4、寒気が入ったり、強風などの荒天日は無理に植えないこと。**

**5、稚苗・中苗・成苗など、その葉齢に合った適期移植に努めること。**

尚、浅植えの目安と、植付け姿勢を真っすぐにして、且つ、浅く植えることによる利点を図1に記したので参照願う。

## 機械移植の利点と省力化

今から44年前頃に田植機が導入され、育苗方式も水苗代や折衷苗代から箱育苗方式に革新的な変化を遂げた。

当時、農家はまったく体験したことがなかったので、指導書（マニュアル）に忠実に一箱当たり200～230gといったように、現在と比べると、想像も出来ない程の「厚まき」であった。

当然、10aに使用する箱数は18～20枚程度で間に合っていた。

その後、健苗育成が叫ばれ、1a30～150gの「薄まき」で10a当たり使用箱数も28～30箱と多くなって現在に至っている。

確かに安定増産はしてきたように思うが、飛躍的な増収になったようには思えない。

40数年前の「厚まきにして10a当たり18～20箱使用」でも10俵以上は穫れたものである。

そんなことを回想しながら、規模拡大や米価下落に対応すべく「少費・省力イナ作」を模索「厚まきにして箱数を削減する」を平成20年の本誌に一度提唱した。

また、我が家でも受託等による規模拡大が進行、直まきの導入と平行して「厚まきによる使用箱数の削減」策も実践してきた。

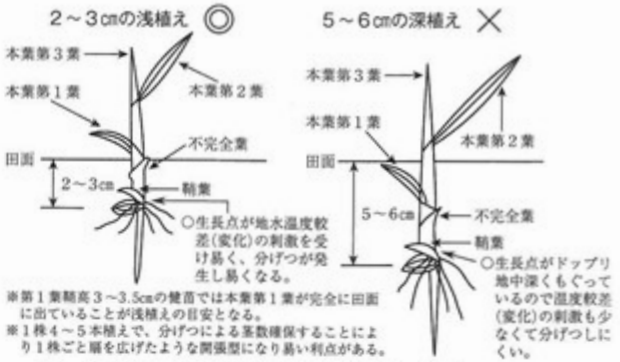
留意したい事は「厚まき」になるほどに葉面積が早期に、いっぱいいっぱい（※葉面積指数7以上）になると生育停滞し、早々に老化苗になり易いので育苗日数はあまり長くしないようにする。

「薄まき苗」以上に適期移植に努めることが重要である。

播種から移植まで「厚まき苗」の特徴をしっかり把握した栽培計画を立て実践できれば、収量・品質共に満足できる結果が得られるように思っている。

尚、直まきも機械移植と平行して実践しているが、作業が短期間に集中して繁雑に成り易い。

全面積を直まき出来れば大変な省力に繋がると思うが、周囲ではまだ大多数が移植栽培であることから、水利関係や鳥害が集中され易かったり問題が多少あるので、全てを直まきにするにはリスクが大き過ぎるように思っているところである。




※第1葉鞘高3～3.5㎝の健苗では本葉第1葉が完全に田面に出ていることが浅植えの目安となる。
※1株4～5本植えで、分げつによる茎数確保することにより1株ごと扇を広げたような開張型になり易い利点がある。

図1　植付け深さのメリットとデメリット（松浦）

**用語の解説**（松浦）

**◎葉面積指数とは**

イネが栽培されているその圃場に生育している全ての葉の面積が、その圃場面積の何倍になっているかを表す数値を**「葉面積指数」**という。

箱育苗の場合の葉面積指数は、1枚（縦60㎝×横30㎝）に生育している苗の全ての葉面積が箱平面積の何倍になっているかを表す数値で、箱育苗では指数が7以上になると生育が停滞する（葉齢が進まない）と言われている。

## 除草剤散布の省力化ジャンボ剤で

除草剤を上手に使うことは、イネの初期生育を良好にする上で大変重要である。

我が家では、直まき以外は基本的に初期除草剤は使わない。

初中期一発だけの除草体系で、ヒエ等の雑草で難儀するようなことはほとんどない。

ジャンボ剤を投入するにあたって留意している事項を述べる。

**1、イネの順調な生育を最優先に考え、移植後約1週間、活着してイネに活力が充ちてから実施すること。**

**2、ミドロや表層剥離等で水面が汚れている状態は避け、雨上がり直後か、水交換して水面が「きれい」な状態で実施すること（均平に拡散しない）。**

**3、日中27℃以上の高温が予想される午前中は避け、夕方の散布として薬害を出さないように留意すること。**

**4、ネズミやケラ穴等を事前にふさいで、水持ちを良くしてから実施すること。**

## 初期生育の促進も除草効果も水持ち次第

移植後に素早く活着して初期生育を良くするには、根付け肥、弁当肥や側条施肥等の手段がある。

いま一つは水持ちを良くして地水温をなるべく早期から高めることが重要である。

5月の庄内、由利地域の灌漑水はまだまだ冷たいので、なるべく水持ちを良くして地水温の上昇に努めることが重要である。

地温が上がると、根の生長が良くなるばかりでなく、施肥してあった基肥の分解吸収がされ易くなることから、初期生育促進拡大に繋がる。また、除草剤効果も高まるものである。